

英国の空港で、日本航空の副操縦士が逮捕された。乗務に際し、血中からなんと規定値の9倍のアルコールが検出された、という。

クルーバスの運転手が酒臭いことを不審に思い、警察に通報したことがきっかけだというから、よほど臭かったのだろう。同行した機長の責任は大きい。

この事件で愕然としたのは、日本には規定値の策定しないこと、そして、それ以上にビックリしたのは、容易に不正可能な社内の検査体制だ。

車の運転ですら、逃げようのない検査と確度の高い検知が強制されているのに、数百人の乗客の命を背負う航空機の操縦クルーは、性善説に依拠したユルい悪習により、酒酔い運転が野放しになっていたのだから驚きだ。

形式やマニュアルに囚われ、いわば机上の危機管理が先行しがちな日本らしい出来事と言えなくもない。

あいまいなルールとなれ合い、その日常の繰り返しだが、「まあこれくらい大丈夫だ」というお墨付きを与え、組織をあげて妥協してしまう。

全日空でも、酒気帯びの事前申告により運行に支障をきたしたが、ある意味、検査が機能し抑止力が働いた結果だ。

戦後、経済発展の過程において、安全にかかわる多くの規制やルールを、性善説にまかせ、あいまいにしてきた。グローバル経済は、組織に内部統制と法令遵守を強制

あいまいな日本の私たち

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

してきたが、妥協となれ合いに弱い日本では、多くの抜け穴が生じている。ルールはあるのに、恣意的な解釈で、それを無視してしまう、そして、いつしかそれを平気で受け入れてしまっている、あいまいな国の私たち：いままずには影響ないから：言い訳をしながら、恣意的な運用に目をつむり、あいまいな自分を許してしまう。

あいまいな日本の私たちは、国の根幹たる安全保障の感性まであいまいだ。

日本の軍隊（自衛隊）は、今もインド洋で他国と軍事訓練をしている。ルールでは、存在しないはずの軍隊が、ルールを逸脱してインド洋にいるのだ。

原発も然り、新安全基準というルール自体が安全ではないし、そもそも活断層大国に存在してはならない、国家破滅のリスクを受け入れている自覚もない。

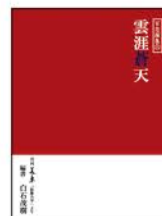
「安全データを改竄しました」その悪びれもしない謝罪会見を見ていると、「ルールの方が現実合っていないだけ、このくらい大丈夫、大丈夫！」という声が聞こえてくる。あいまいさのほころびを繕ってきた日本人の実直さも、今は昔のこと、「ルールは大事」だが、それを作るのも、変えるのも私たちだ。

解釈や援用、妥協やなれ合い、抜け道を作ってまで蔑ろにするようなルールなら、もはやルールではない。大事にされないあいまいなルールは、その存在自体が、安全を脅かすルートになってしまう。



Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集
『雲涯蒼天』
定価700円
Amazonにて販売中